

寄稿 勇気を出して「Japan」 高嶋陽子(法3)



▲イリノイ大学のキャンパス

03年度長期交換留学生として米イリノイ大学アーバナ・シャンペイン校に留学中

6月からイリノイ大学のIEI(Intensive English Institute=正規授業に入る前の英語研修)で学んだ後、8月から大学での正規授業が始まりました。こちらでの生活は、想像以上に充実したものになっています。楽しい反面、すべてにおいて自己管理や自己責任を負う大変さも経験し、多くのことを学んでいると日々、実感しています。



▲シカゴを訪ねて(左が高嶋さん)

友達もたくさん出来ました。IEIでは、韓国人、ほかにメキシコ人、イタリア人、タイ人、台湾人と国際色豊かです。英語を学ぶと同時に、各国の違いを知ることが出来たのは、とても興味深く良い経験となりました。

正規授業では、あらためて水準の高さを感じています。クラスでは学生が自発的に発言し、宿題は毎日、山のように出されます。イリノイ大学で優秀な学生と一緒に勉強できることは、とても刺激的でうれしく思います。

この間、初めてクラスで発言することが出来ました。勇気を出して手を挙げ、発した言葉は「Japan」でした。比較政治のクラスで教授が人口の多い国トップ10を尋ねていたのです。IEIでは、ほぼアジア人で構成されていたクラスでしたが、イリノイ大学のクラスではアジア人は少なく、環境の変化や語学力の差に少し圧倒されましたが、発言出来た後、肩がふっと軽くなった気がしました。良いスタートが切れたのか、その後はディスカッションでも思うように意見が言えるようになりました。まだまだ勉強面でも生活面でも足りないことばかりですが、この5カ月間で学んだことはいつでも間違いを恐れず、積極的に自分から行動することが大事だということで、これからもたくさんの困難に直面すると思いますが、頑張っ乗り越えていきたいと思ひます。

【ニュース専修11月号5面】

林真理子作品をロシア語に翻訳するのが夢 ユーリア・ルビンツェワさんにインタビュー

大学院文学研究科修士課程日本語日本文学研究コース1年



ロシアのサンクトペルブルク文化芸術大学図書館学部に在学中に日本語を学び、日本で活躍する女流作家を知りました。吉本ばなな、林真理子、萩野アンナ…中でも女性の日常の出来事や感情を「意地悪なほど」ストレートに表現している林真理子が好きになりました。『最終便に間に合えば』『年下の女友だち』『美女入門』など、林作品の小説やエッセーをいつの日かロシア語に翻訳するのが夢です。現代日本文学が専門の柘植光彦教授の下で、研究に励んでいます。

いま、授業の現代日本文学研究では、高村光太郎の「知恵子抄」を講読しています。詩の読解は難しいですが、小説とはまた違った趣があり、興味深く取り組んでいます。

専大に留学する前は、交換留学で岩手大学に1年間学び、北国の人々の優しさに触れました。昨夏3カ月間は東京・日の出町で、障害を持つ人たちとのボランティアキャンプに参加。すばらしいプログラムを体感しました。1年間だけですが、ロシアの日本語学校で日本語を教えたこともあります。それら一つひとつが「日本」を学んでいく上での貴重な経験となりました。

日の出村キャンプで参加者から専大の「日本語・日本事情プログラム」のことを聞き、今年の冬のプログラムに参加。そこで柘植先生存在を知り、日本で現代文学の知識を深めたいと大学院への進学を決意しました。

卒業まで日本の伝統的芸術にも積極的に触れ、さまざまなことに挑戦したいと思っています。ロシアは、日本にとって近くて遠い国のようです。アルバイトでロシア語の個人レッスンをしていますが、ロシアの文化を日本の若い世代にもっともっと広めていけたらと思っています。

【ニュース専修11月号5面】